

[語用論の新しい流れ]

「東アジアの語用論」：第 16 回国際語用論会議 Preconference

小野寺 典 子
青山学院大学

1. Preconference 概要

隔年開催の国際語用論会議 (International Pragmatics Conference) が、今年 6 月 9 日から 14 日まで、香港理工大学で開催された。5 日間の研究発表に先立ち、9 日に、pre-conference として「東アジアの語用論：その歴史と発達」というシンポジウムが行われた。中国の Xinren Chen 氏 (南京大学) と香港の Doreen Wu 氏 (香港理工大学) によってオーガナイズされた、このシンポジウムでは東アジア 5 地域 (香港・中国・台湾・韓国・日本) の語用論関係の学会から代表者が出て、それぞれの地域の「語用論の歴史と発達」を報告しあうというものであった。

IPrA (国際語用論学会。会議名の IPC より、こちらの方で愛称のように呼ばれることが多い) の登録前日に行われたシンポジウムであったが、理工大学の最先端の設備を有した大教室は、開始時刻の午前 9 時には、アジア・欧米などからの、特にアジア言語を研究する若い人たちで埋め尽くされ、立ち見が出るほどの賑わいとなった。本学会からは、前会長林宅男先生と林礼子先生・副会長滝浦真人先生他数名の先生方が参加された。

Chen 氏・Wu 氏による冒頭言のあと、日本 (The Pragmatic Society of Japan; PSJ) ・韓国 (The Discourse Cognitive Linguistics Society, Korea; DCLSK) ・台湾 (Linguistic Society of Taiwan) ・香港 (The Linguistic Society of Hong Kong; LSHK) ・Association for Applied Linguistics; HAAL) ・中国 (China Pragmatics Association; CPrA) から 1 ないし 2 名のスピーカーが順に発表し、最後にハンガリーの東アジア言語研究者 Daniel Kadar 氏が報告を行った。

日本と中国は、「語用論学会」からの報告、台湾と香港は「言語学会」から、韓国は「談話認知言語学会」からの報告となった。

2. 5 地域の「語用論の歴史と発達」

各地域の語用論研究の歴史と発達について 25 分で発表するというものであったが、実際には、スピーカーの研究テーマを中心に発表したものもあった。ほぼ口頭のみで（韓国と日本以外はハンドアウトなしで）行われ、以下が、各地域の報告のあらましである。

【韓国】

(1) Kyu-Hyun Kim 氏 (Kyung Hee University, Seoul)

『韓国の会話分析：言語と社会的相互作用への語用論的アプローチ』

CA(会話分析；Conversation Analysis) 研究者 Kim 氏は、主に韓国における CA 分野の発展について報告された：*Language* に掲載された Sacks et al. (1974) 論文によって、会話分析は世界的に認められた語用論の 1 方法論として登場した。そのインパクトから 1980 年代には、何人もの言語学者が、社会的相互作用の形式的構造を見るため、CA へと転向した。Levinson (1983) による著書 *Pragmatics* が言語学者 (Lee and Kwon 1992) によって韓国語に訳されたことで、CA が語用論の一分野であることが知られ、普及するのに役立った。¹ 1990 年代には、韓国の CA はよりまとまった形で実践されるようになる。それは、主に海外で学んだ応用言語学者・談話分析者によって進められた。CA の分析的考え方の厳密な経験主義が、より正確に理解される必要がある。それは、分類に依存することや心理学的分析ではない。韓国語の会話構造／会話実践の研究には、人間行動の文化的相 (emic) という視点に立った、より深い洞察が求められる。

(2) Seongha Rhee 氏 (Hankuk University of Foreign Studies)

『語用論から文法へ：文法化研究の現状と将来』

主に、語用論要素の文法化研究で知られる Rhee 氏は、今後将来にわたって、「文法化研究」が言語構造の出現に作用する力を見極めるに、極めて重要な役割を果たすことを主旨として、韓国語全体の品詞にわたり、「語用論的推論」がカギとなるメカニズムとして働き、多くの語用論的要素が文法化するさまを示してみせた。

この壮大なスケールの研究の序論は次の通りである：言語構造は、文法化として知られる漸次的プロセスを通して、絶え間なく出現する。このよく見られる通時的な現象は、多

¹ Levinson (1983) *Pragmatics* (Cambridge University Press) の第 6 章で、CA が見る重要な言語現象について、80 ページにわたり例証と説明がなされている。このことが、韓国だけでなく、日本でも CA の考え方の普及、そして、日本の語用論への貢献になったということもあるだろう。『語用論研究』vol.20 の早野薫氏の「語用論の新しい流れ」でも「Levinson が (中略) その価値を伝えてくれる良きスポークスパーソンであった」旨が述べられている (早野 2019: 165 他)。

様なメカニズムを通して様々な文法レベルで起きる。そうしたメカニズムの中で、語用論的推論が多くの研究の中で注目されてきており、これまで主になされてきた共時的なりリアルタイムの言語使用のみならず、文法への累積的效果を調べるような通時的な語用論研究が重要なのである。この発表では、語用論的推論が主要な役割を果たした文法化を考察し、言語構造の出現を決める力を見極める努力において、語用論研究が果たす重大な役割について報告する。

韓国語の基本的性質は次の通りである。主要部が終端に来る、膠着語で、SOV語順を取る。代名詞主語省略の、比較的自由的な語順の言語であり、多くの文法マーカーは理解可能ならば省略することができる。多くの後置詞・動詞接尾辞を有している。

韓国の語用論と文法：最近の発展について。i. これまで共時的分布に焦点を当ててきた。ii. 主に意味論的性質と音韻変化に焦点を当ててきた。iii. 歴史言語学者は、語源に関心を注ぎ、発達のメカニズムについては取り上げてこなかった。

これに続き、後置詞・接続表現・終助詞・助動詞・談話標識という幅広いカテゴリにおいて、語用論的推論がもたらす意味が意味化する事象が見られるという、Rhee氏の壮大な文法化研究が例証とともにハンドアウトを用いて紹介された。

ほんの一例として、韓国語の談話標識(DMs)を挙げる。約160の広範囲にはたらくDMsを持つが、DM *kulay*には多様な機能がある。[詳細な談話分析によって見つけられたであろう]次の様な機能が、まず、指摘され、その後、そうした機能の発達について、認知的視点から考察・解明する様子が示された(Koo and Rhee 2018)。

DM *kulay* (元の意味: 'It is so')

- a. 同意: 肯定的返答トークン・あいづち
- b. 承認: 談話発動・関心を引き寄せる・終結の前段階・電話会話の終結・強調/同調/調節・譲歩的受諾・強調/驚き
- c. 見せかけの承認: 挑戦・不満・皮肉・丸め込み
- d. 自分に向けた肯定: 自己焦点化・自己肯定

こうした多機能は、現在の韓国語における多義だと思われるが、こうした1つ1つの意味の発達について、認知的に詳しい分析をし、チャート化して見せている。b承認であれば、「It is so」が「状況について了解した」→「会話する準備ができている」(談話発動)と「終結する準備ができている」(終結の前段階)とに分かれ、談話発動 → 終結の前段階という発達の順まで提案されている。b承認全体としては、「談話発動」→「終結の前段階」→「同調」→「譲歩」→「強調・驚き」という順である。こうした発達順がc見せかけの承認・d自分に向けた肯定についても、同様に、発達順がチャート化して提案された。

Rhee氏の結論は次の3点である。1. 韓国の言語研究において、語用論は長い間軽視されてきたが、最近、細やかに文法機能を形作る「語用論推論」の重要な役割が明らかに

なってきた。2. 語用論的に動機づけられた文法化の研究が、文法と人の認知の性質に光を当てることになる。3. いかなる文法形式もコンテクストなしにゼロから出現することはないので、語用論こそが、文法化と一般言語研究において、最重要の視点である。

こうして、氏の研究は、韓国語全体にわたる文法化現象を射程として、人の認知、また韓国文化におけるさまざまな価値観（例：食に対しての習慣など）まで語用論的推論として働くことを示している。言語と認知・文化といった関係も射程に入れた、壮大なスケールを持っており、他言語の研究にも大いに示唆的なものであった。

【台湾】

Miao Hsia Chang 氏 and Marie Meili Yeh 氏 (National Taiwan Normal University and National Tsing Hua University) 『台湾の談話研究と語用論研究：その最先端』

お二人でご発表の予定だったが、Yeh 氏が台湾の空港でビザ問題から出国が許されず、Chang 氏お一人の発表となった。1980 年以降、特に最近 20 年間（2000-2019）に台湾で出版された「談話」と「語用論」研究について報告する。

中華民国 (Republic of China) 科学技術省のデータベースで、言語学分野の中、「語用論」「談話分析」2つの分野から研究者を検索した。その検索から、さらに2つの下位分野「言語学的」「応用言語学的」に分けることができた。言語学研究に、書きことば・話しことば両方の談話分析が含まれるが、後者の談話分析のほうが多数であった。「語用論」のトピックとしては「グライス流語用論」「発話行為」「ポライトネス」「関連性理論」「認知語用論」が見られた。「話しことばの談話分析」では、創発的構造と自然発話における構文に焦点が置かれていた。対象となる言語は、主に、標準中国語 (Mandarin) であったが、閩南語 (びんなんご)・客家語 (はっかご)・台湾諸語を対象とした少数の研究もあった。

応用言語学的研究で見られたのは、ムーブ構造・ジャンル分析・意味の一貫性と結束性 (coherence and cohesion)・語用論標識・談話形式・第二言語学習者による発話行為の用法 (特に英語・日本語話者)・第一/第二言語の比較研究・そうした比較研究の第二言語教育への応用などである。他の関連研究は、批判的談話分析・医療現場のコミュニケーションなどであった。

談話・語用論研究が発展を続ける中、伸びている傾向として、データ検索のためのコーパス利用、患者ベースの神経言語学的研究、そして、インターネット基盤のデータの分析 (文法化・談話分析また双方に関連したもの) といった点が認められる。

【香港】

Winnie Cheng 氏 and Doreen Wu 氏 (The Hong Kong Polytechnic University)

『香港の語用論研究：過去と未来』

香港という土地の地理的コンテクストも含めた研究がなされている。香港における民主

制に関する論考も出ている。やはり、インターネット基盤のデータを使用したものが増加している。異文化間 (intercultural) という視点から、文化横断的 (transcultural) という視点も出てきている。

【中国】

Xinren Chen 氏 (Nanjing University) and Min Li 氏 (Jiangsu University)

『中国の語用論研究：歴史と発達』

中国における語用論研究は、1980 年の Hu Zhuanglin 教授による紹介論文 “pragmatics” に始まり、He Ziran 氏による中国で初めての教科書 *A Survey of Pragmatics* により、素早い広がりを見せた。中国の語用論研究は、40 年の歴史を持ちながら、その普及と発展について、ほとんど海外の研究者に知られることがなかった。大きな理由は、1 文献の多さ、2 適切な分析手段を有してこなかったこと、3 関連するデータの収集の難しさ、4 研究の多くが中国語で出版されてきたこと、である。中国の語用論研究については、そのアクセスしにくさから、世界全体の語用論分野では、部分的にしか理解されていなかったり、表現不十分だと捉えられてきた。

本発表では、最新の CiteSpace5.3 の力もあり、中国語用論学会 (China Pragmatics Association; CPrA) が発展に寄与してきたことも含め、中国における語用論研究について報告する。調査による 5 点を順に報告する。(1) 1997 年以來、中国の語用論研究は飛躍的に発展したが、2003 年ピークに達し、最近、少し減退した。(2) 研究論文は He Ziran や Chen Xinren らによって書かれ、主に、*Foreign Language Research*, *Foreign Languages and Their Teaching*, *Modern Foreign Languages* 誌等に発表された。(3) トピックとしては、1980 年代前半、語用論の基礎的トピックを紹介し、後半、発話行為理論に集中した。1990 年代前半は会話含意を探求し、後半、認知語用論の話題を扱い、また、21 世紀に入ると、学際的研究を最新の焦点として、コーパス語用論・中間言語語用論・対人語用論・インターネット語用論に取り組んだ。(4) 中国における語用論研究は、国際的出版の増大により、ますます国際化している。(5) 中国語用論学会による活発な促進活動：会議・フォーラム・論文シリーズのプロジェクト・ジャーナルの出版・研修プログラムなどが、最近の国際交流・国際協力を後押ししている。

【日本】

小野寺典子 (青山学院大学) 『日本における語用論の発展と、その分野全体への貢献』

この発表では次の 4 点を報告する：(1) 日本の近代化の時期に、西洋より言語学の用語類を取り入れたこと。(2) 日本における語用論分野の発展。(3) 東アジアから語用論分野全体への貢献。(4) 「歴史語用論」(ジャーナル) に見る、対象言語の変遷。

(1) 日本の近代化 (明治期の文明開化) の時期 (18 世紀後半から 19 世紀にかけて)、日

本は西洋より衣食住を含め多くのものを取り入れたが、言語学の用語類も入ってきた。品詞・時制・文の成分などに関する用語である。しかし、それは、用語の借用に過ぎず、日本では常に日本語のありのままの姿が考察されるようにと、研究・議論が続けられてきた。例えば、明治20年代に英語統語論から「主語・述語・付加詞」といった考えが紹介されたが、30年代には日本語特有の言語現象が研究され、次第に、用語の使用と分類も、日本語の実態に即したものが整えられていった(服部2017: 482)。例えば、明治41年(1908年)山田孝雄氏による『日本文法論』が出現、そしてそれに対する批判が松下大三郎氏から出されたが、こうした多くの研究の積み重ねによって、現在の日本語の品詞分類も含め、基礎が築かれていったようである(服部2017: 446)。西洋の文典から取り入れられた用語は、例として「名詞・代名詞・動詞・接続詞」、また、時制の「現在・完了・過去・未来」などであった。

つまり、文明開化時の西洋言語学からの影響から、決して、日本語研究全体が西洋からの枠組みで研究されるようになったわけではなく、視点・概念・用語の取入れであった。なぜなら、日本語研究の西洋化にはそれ自体に矛盾が潜んでいる。例えば、西洋言語は屈折語であるが、日本語は膠着語である。また、西洋言語には存在しない要素(例: 接続助詞)があり、そもそも、西洋言語と日本語を同じ枠組みで研究することが不可能だからである。

(2) 現在、語用論に関する研究を、口頭および論文で発表するには、主に5つの言語学系学会がある。日本語学会(LSJ)、日本英語学会(ELSJ)、日本語用論学会(PSJ)、社会言語科学会(JASS)、日本認知言語学会(JCLA)であり、それぞれを紹介した。1980年代を振り返れば、筆者の院生時代の始まりであった1985年の英語学会大会で、研究発表の実に90%がチョムスキーによる生成文法についてであり、社会言語学の発表はたった1本であった。それから40年、語用論分野の口頭発表・論文は増え続け、今では上記の学会大会で語用論のセッションは必ず1つか複数あるまでとなった。語用論は、日本の言語学においても最も研究の盛んな分野の1つとなった。

日本の語用論の理論的内容の発達は、実は、日本に限らず世界を通じて同様の傾向だと言える。1970年代、語用論は“pragmatic wastebasket”(Bar-Hillel 1971)と言われ、“Meaning マイナス Truth conditions (真理条件)”(Gazdar 1979: 2)とされた(片岡 2011)。語用論とは、意味論の範疇から落ちてしまった全ての雑多なものを含む、という意味である。ところが、この語用論の「ゴミ箱的」性質ゆえに、この分野は「刻々変化する言語と社会を読み解く」研究として、その後、「宝箱」のような領域となった(片岡 2011: 137)。具体的なトピックの変遷を見てみよう。1980年代、語用論は発話行為・ダイクシス・前提・推論・関連性・メタファー・ポライトネスが中心であったが、1990年から現在にかけては、ネオグライス主義・談話標識・歴史語用論・文法化・[構文化](筆者加筆)・会話分析・(批判的)談話分析・形式語用論・ジェンダー・アイデンティ

ティ・関連性理論・マルチモダリティ等を指す（片岡 2011: 138 参照）。これらのトピックとトピック変遷は、日本に限ってのものではなく、世界共通に見られると言える。語用論学会でも意見が出ていたが、私たちは普段から「日本で語用論を」研究するとか、「アジア地域から、語用論を」研究するといったスタンスを特に取ることは少なく、研究はどこにいても同じ、という立場であることも報告した。

(3) 今回、香港開催の IPrA 会議のテーマが『周辺領域の語用論』であった。[このテーマ自体に多少の違和感を覚えた人もあったかもしれない]。会議のサイトには問題点として、「アカデミアは、ヨーロッパ中心主義の理論的傾向から脱却すべきだ」「Metropole（植民地の本国）からの語用論は、いかに [本国に] 認識・知識的主導権を奪われずに済むか?」といった文言が掲げられていた。実際、言語学を研究する際、こうしたバイアスは少なからず感じられるが、アジア地域の語用論研究者としてできることは「言語学および語用論の世界規模で行われる議論に、常に参加し続けること」ではないか、と報告した。その実践のために、研究成果を、ローカル言語（日・韓・中国語）のみならず、英語で発信することが大切だろう。今の時代、英語で発信しさえすれば、研究成果も瞬く間に世界中に届けられる。

(4) 最後の節では、語用論分野でアジア言語がどの程度研究対象となってきたかを調べるため、一下位分野である歴史語用論のジャーナル (*Journal of Historical Pragmatics*) に掲載された論文中、対象となった言語は何かを調べてみた。第1段階（創刊の2000年から2003年まで）、第2段階（2004年から2006年まで）、第3段階（2015年から2017年まで）の各巻での割合は次の通りであった。第1段階：論文全体の85%が英語を対象としていた。他の言語は、西・独・蘭・仏語、そしてBC1000年のヴェーダ語で、日本語についての論文が1本だった。歴史語用論の最初の論文集 (Jucker 1995) でも91%が英語を対象とした研究であり、やはり、歴史語用論は英語の研究で始まったと言える。

第2段階（2004-2006年）では、英語を対象とした論文の割合は46%と半数にまで減少する。登場した言語は、ヨーロッパ言語のバラエティーが広がり、ポルトガル語・スウェーデン語、またキプロスのギリシャ語・ケベック州の仏語のような言語変種も増えた。アジア言語は中国語のみ、論文1本に現れた。

第3段階（2015-2017年）は、英語以外がもっと台頭するかとの予想に反し、英語対象の論文が46%と居留まった。やはり現在でも、研究の半数は英語が対象である。アジア言語は、日本語2本、韓国語2本、中国語1本と増加はした。第2段階までに見られなかった、別の印欧語（ハンガリー語など）が登場した。この *JHP* の調査から、1点経験的なことに気づいた。それは、どんな人が編者を務めるかで、その号に掲載される対象言語にも変化がおきるようだ。この段階の2016年第2号は、筆者を含む日本人2名と韓国人1名でゲスト編集しており、欧州言語とともに、日本語1本、中国語1本、韓国語2本を掲載している。この「東アジアの語用論」シンポジウムの発表では、「ぜひ今後も、英語で

書き、編集し、仕事を続けましょう」とスローガンを述べた次第である。そうした東アジアからの発信があれば、国際的な議論に参加し続けられるはずである。東アジアは、言語学に対して、決して raw materials(原料となる言語データ) だけを提供しているのではなく、ヨーロッパ言語とは類型論的性質の異なる言語の分析という、言語研究にとっての活性剤を提供できる。

【ジャーナル『東アジアの語用論』より】

Daniel Kadar 氏 (Hungarian Academy of Sciences/Dalian University of Foreign Languages) 『東アジアの語用論：共同研究という展望』

東アジアの語用論は、社会語用論研究にとって重要な部分でありながら、西洋語用論モデルの試験場という性格を有してきたようだ。東アジア言語と英語を比較するだけでなく、もっと中日韓の言語の相互比較をすべきだ。ジャーナル『東アジアの語用論』と最近発足したシンポジウムシリーズが、中日韓また他国の研究者との協力体制を生かしていく場を提供できる。

3. 東アジアの語用論：まとめ

東アジア 5 地域の語用論についての、初めてのシンポジウムということで、各地域の語用論分野のこれまでと、扱うトピックなどがわかり、興味深く、有意義なものであった。5 地域で取り上げている基本的トピックは、発話行為・ダイクシス・談話分析・会話分析・文化化他であり、² また、最近のインターネット媒体の多用といった研究の方向性も共通して見られた。今回の preconference の成果が一冊の本にまとまる計画もある。本小論で、詳細まで描き切れなかった地域の発表については、是非、今後まとめられる書籍を参照頂ければ幸甚である。³

今後、こうした東アジアの協同体制が発信を続けていけば、世界の語用論分野に大きな貢献ができるのではないか。そんなエネルギーが感じられた preconference であった。

² この preconference では、5 地域の「語用論の歴史と発展」が報告された。5 地域で現在も共通して取り上げている、こうした基本トピックは、そもそも metropole (西洋) から来ているという点は否めない。

³ 2020 年 2 月現在、*East Asian Pragmatics: Common Topics and Indigenous Concerns* (Xinren CHEN 氏 & Doreen WU 氏編) という書籍の刊行が計画されている。

参考文献

- Bar-Hillel, Yehoshua. 1971. "Out of the Pragmatic Wastebasket." *Linguistic Inquiry* 2, 401-407.
- Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. New York: Academic Press.
- 服部 隆. 2017. 『明治期における日本語文法研究史』東京：ひつじ書房.
- 早野 薫. 2019. 「レヴィンソンが牽引するインタラクション研究」、〈語用論の新しい流れ〉『語用論研究』20、160-167.
- Jucker, Andreas H. (ed.) 1995. *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins.
- 片岡邦好. 2011. 「語用論研究の新たな展開」、『日本語学』30-14、137-149.
- Koo, Hyun Jung and Seongha Rhee. 2018. "On the Emergence of Polyfunctionality of Discourse Markers: The Case of *kulay* 'it is so' in Korean." Paper presented at the 36th International Conference of the Spanish Society for Applied Linguistics (AESLA-2018), Universidade de Cádiz, April 19-21, 2018.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.